

令和5年(2023年)8月23日

れきみん

資料館だより

No. Ⅲ-43

相生市立歴史民俗資料館

〈資料紹介27〉 瓜生羅漢石仏 — 伝承と製作時期・製作者の謎 —

矢野町瓜生^{うりゆう}字鍛冶屋谷の溪谷(通称羅漢^{うりゆうらかんせきぶつ}溪谷)に、「瓜生羅漢石仏」と呼ばれる石仏群が存在します。山腹に穿たれ幅約9m、高さ約5m、奥行約4mの岩窟の中に19体が安置されており、市内外から多くの人々が見学・参拝に訪れています。



瓜生羅漢石仏(中央部)



瓜生羅漢石仏配置略図(根立1987一部改変)

中央に三尊を置き、左右に各八尊の像を配しています。一般的には中央の三尊が釈迦如来しやかによらい（図の1）と文殊菩薩・普賢菩薩（図の2・3）、左右が十六羅漢らかんといわれていますが、異論もあるようです。各像の大きさはほぼ等身大の大きさで、中央の三尊が79.6～104.8 cm（中尊高104.8 cm）、左右の十六尊は70.6～119.4 cmを測ります。凝灰岩ぎようかいがんと思われる柱状石を彫り出して作られていますが、頭部は丸彫りとするものが多く、体部はほぼ半肉彫りとしています。鎌倉時代の画像に見られるような図像上の明確なきまりは失われており、鎌倉時代よりかなり後の作であろうとされています（根立 1987）。

この石仏について、18世紀に刊行された地誌には以下のように記されています。作者を弘法大師、あるいは6世紀ごろに渡来した百濟僧くだら えべんの恵便と伝えています。伝承の域を出るものではありません（恵便については『降相記』(1348頃)の記事に基づいていると考えられている）（平井 1987）。

- 瓜生 五百羅漢の石像あり。今の有る所は釈迦、文殊、普賢、如意輪観音と十六羅漢、合て廿軀也。恵便の作とも云。又弘法大師の作と云々。（『播州赤穂郡志』1727、1247 加筆）
- 五百羅漢 瓜生村に有之。方三十間ばかり、奥行五七間の窟の中に、仏像三十軀ばかり残り。弘法大師の作と云。（『播磨古跡考』1755）
- 矢野庄ニ瓜生村五百羅漢ノ石像アリ。今悉く散失ス。今ノ所在ハ釈迦、文殊、普賢、如意輪観音ト十六羅漢、合テ二十軀アリ。作者不詳。或人曰、往昔恵便ノ徒是ヲ作ルトモ云、又或説に弘法大師是ヲ作ルトモ云、又元来十八羅漢也と云。今七堂伽藍の礎残レリ。方三十間許、奥行五十間ノ窟此ニアリ。（『播磨鑑』1762）

上記3地誌には、石像の数をそれぞれ「廿軀」「三十軀ばかり」「二十軀」と記しており、かつてはもっと石仏があった可能性もあります。

実際の製作年代については戦前から言及され、魚澄惣五郎（歴史学者）らは室町中期としましたが、戦後、江戸中期以降の作とする研究者も現れました。

江戸中期以降の作とする見方に疑問をもった高坂 好（播磨中世史研究者）は、「東寺百合文書」の中の史料（にじゅういつくかたひようじようひきつけ）（二十一口方評定引付 応永8年(1401)）に拠って、「岩屋谷」の僧「是見」が応永8年(1401)から作り始めたと考えました（高坂 1964）。

一方、根立研介は、「東寺百合文書」の記述は仏像に関してはあいまいで、本石仏に当たる確証はないと批判するとともに、像の自由闊達な作風を重視し、近世の芸術作品との共通点を強調しています（根立 1987）。

いずれにしても、瓜生羅漢石仏の製作年代・製作者（集団）は解明されたとはいいいがたく、今後とも追究すべき大きな課題といえるでしょう。

なお、瓜生羅漢石仏は昭和初期に兵庫県の史跡に指定されましたが、1953年（昭和28）に兵庫県文化財保護条例が新しく制定されたことにより、自動的に指定が解除されました。

〈参考文献・図出典〉

熱田 公・馬田綾子 1990『相生市史』第7巻（相生市・相生市教育委員会）

高坂 好 1964「東寺領矢野荘における寺院と神社について-矢野石仏の製作年代とその作者-」『播磨』第60号（西播史談会） 後、宇那木隆司・寿松 博編 1991『中世播磨と赤松氏』（臨川書店）所収

根立研介 1987「美術工芸品」『相生市史』第4巻（相生市・相生市教育委員会）

平井 漢 1987「伝説」『相生市史』第4巻（相生市・相生市教育委員会）

（中濱久喜）